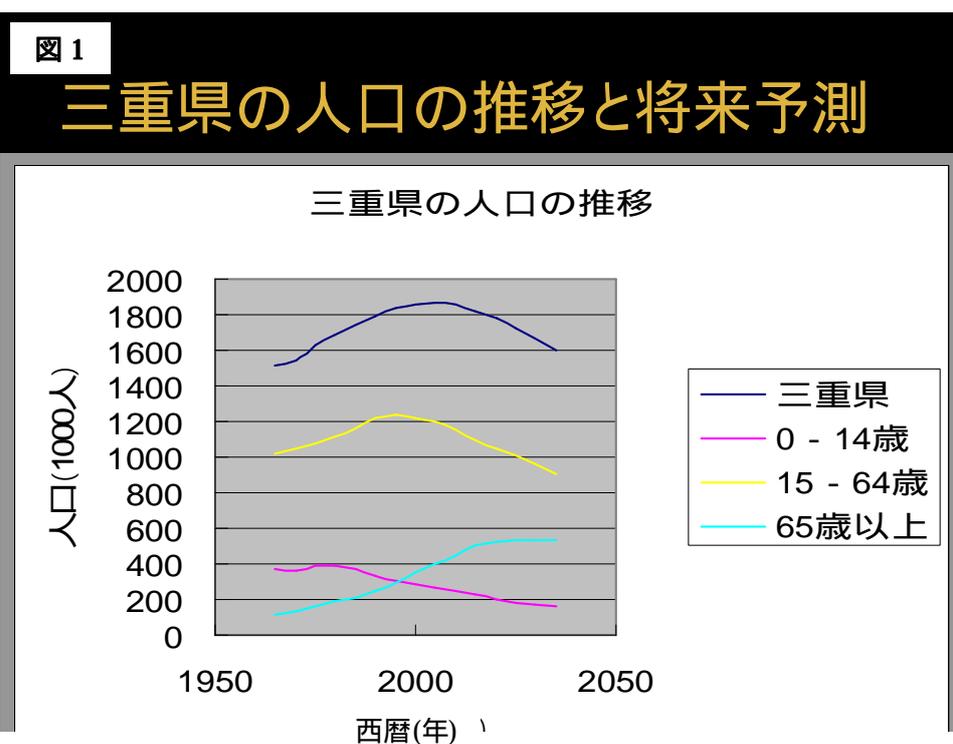


1. 人口的側面

日本の人口がピークを迎え、人口減少とりわけ労働力減少が経済成長の先行きを不安にしているが、図1に示すように三重県も例外ではない。人口が減少すれば資源の消費量も減り、環境への負荷も減る。よって人口減少そのものが「持続可能な成長」に対して悪い影響を与えるとは限らない。問題は、図2に示すように、若い人たちが結婚しなくなったことにある。20世紀後半からすでに婚姻数が減り始め、一時盛り返したかに見えたが、トレンドで見る限り減り続けている。



この傾向は図3に示すように、生涯未婚率に顕著に顕れている。20世紀後半から急激に上昇し21世紀にはいって、その勢いは止まらない。

若者達が結婚しない理由には

女性の社会進出が盛んになり、人生の優先順位が「家庭」より「仕事」になってきた。男性一人の収入では、結婚して家族をやしない、家庭を維持するのが難しくなってきた。

結婚して出産・育児をするには、女性への負担が多く、それならばいっそ結婚しない道を選ぶ人が増えた。

その他

図2

三重県の婚姻数

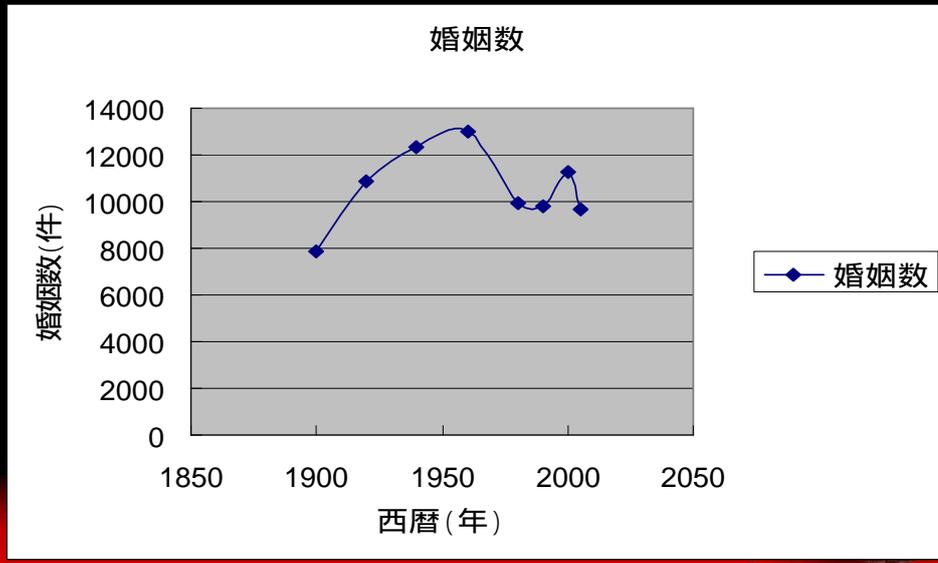
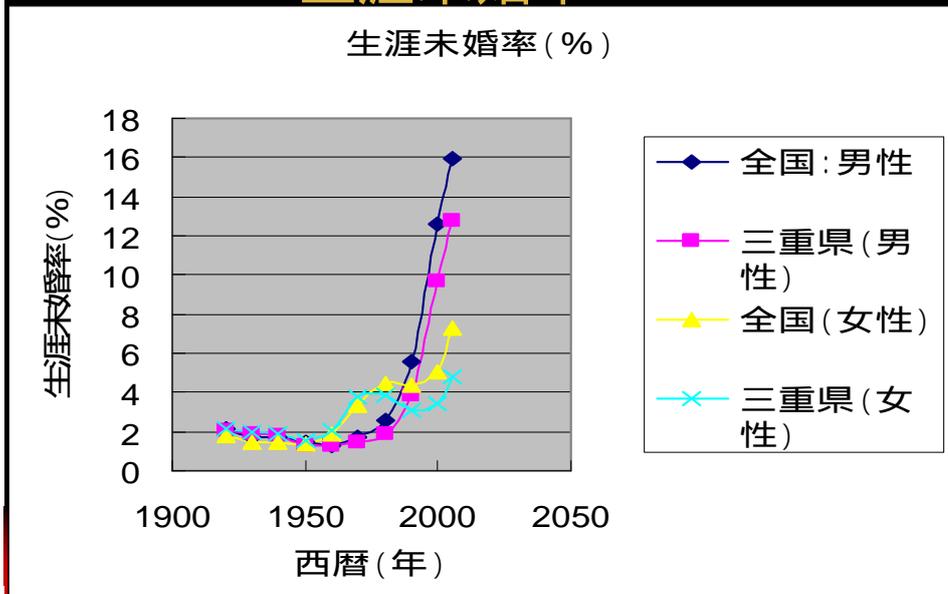


図3

生涯未婚率



その結果、図4に示すように、核家族化が一層進み、世帯数が増えて逆に世帯人員すなわち家族の数が減ってきた。これは 持続可能な社会 を維持するのを妨げる現象であろう。

若い人たちが、積極的に結婚しない ことと、条件が揃わないので 結婚できない のとは意味が違う。アラフォー という言葉が流行ったり、有料の結婚相談所が繁盛したりしている現状は、結婚できない 状況を背景にしているのではないだろうか。

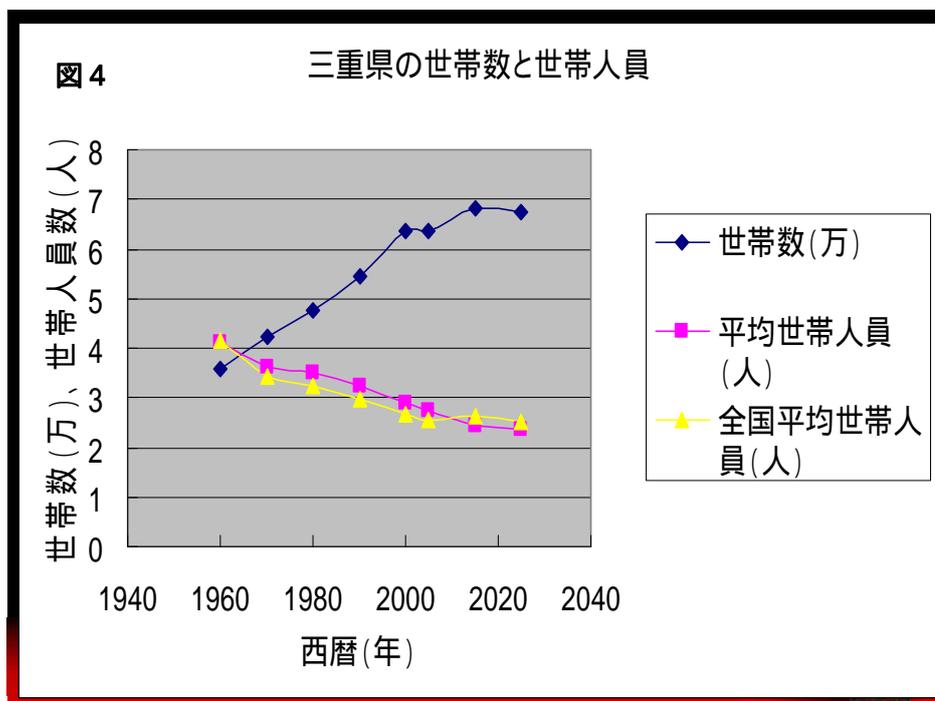


表1 北勢地域の人口と世帯数 (平成17年度)

	人口(万人)	世帯数(万)	平均(人)
● 四日市市	30.38	11.21	(2.71)
● 桑名市	13.90	4.82	(2.88)
● 鈴鹿市	19.31	6.91	(2.79)
● いなべ市	4.65	1.56	(2.98)
● 東員町	2.59	0.812	(3.18)

三重県でも、都市化が家族構成を変えている

結婚しない若者の割合は都会の方が地方より多い。しかし、その差は表 1 に示す北勢地域でみるように、それほど顕著ではない。三重県の長期的な 持続可能性 を論じる場合には無視できる範囲であろう。

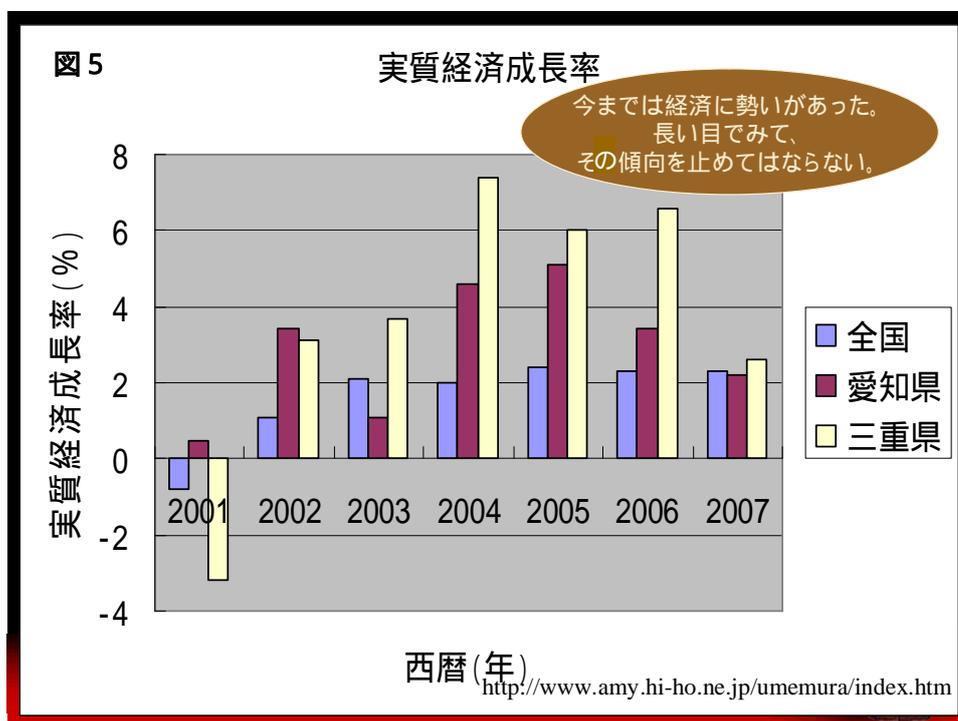


図 5 に示すように、21 世紀に入ってから 2007 年までは、三重県の実質経済成長率は全国平均を大幅に超えており愛知県をも上回っていた。米国に始まる金融破たんの影響で、経済成長が 2009 年夏まではマイナスに転じてしまった。しかし、それ以降の経済成長についてのポテンシャルは未だに持っていると期待したい。それを支える高度な労働力を長期的に提供するとなると、労働人口の減少が抑制要因になる可能性を否定できないだろう。

別の表現をとるなら、若者達が健全な結婚をし、女性の社会進出も可能にするような社会があつてこそ、長期的に人口の急激な減少を防ぐことができ、また、若者たちに社会が生き甲斐を提供することが可能になる。

2 . 地域間の差異

三重県は北勢地域に工業が発展し、津や伊勢、志摩には観光資源が豊富で、南部には森林資源に恵まれている。経済活動すなわち「お金の流れ」という視点だけで表現すると、地域間格差ということなるが、持続可能な成長という視点でみると、自然に恵まれていること、生活に潤いがあること、生き甲斐があることなど、お金では計れない要因が多数あるので、この言葉は余り適切であるとは思えない。

しかし、あえて地域間格差をみてみると、図 6 に見るように尾鷲市や熊野市ですら産業が衰退し、有効求人倍率が大きく 1 を下回っている。熊野古道という世界遺産の

他にも海洋深層水利用、クエの養殖、自然体験ツアーなどメニューが揃いつつあるのに、人がそこに十分に集まってこないのが、経済の持続性を阻害している。しかし、このことは北勢地域や県外の都会から現役を引退した人たちが長期滞在するとか、移住するなどで、人間性を取り戻すには好適な場所であることを物語っている。

図6

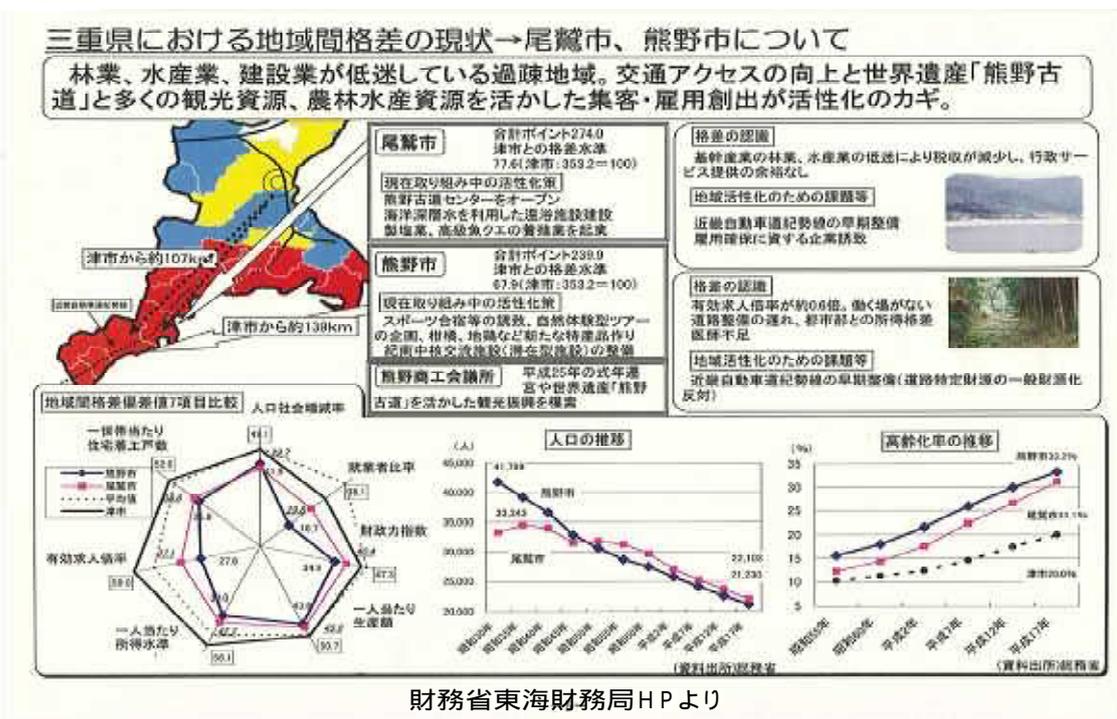


図7

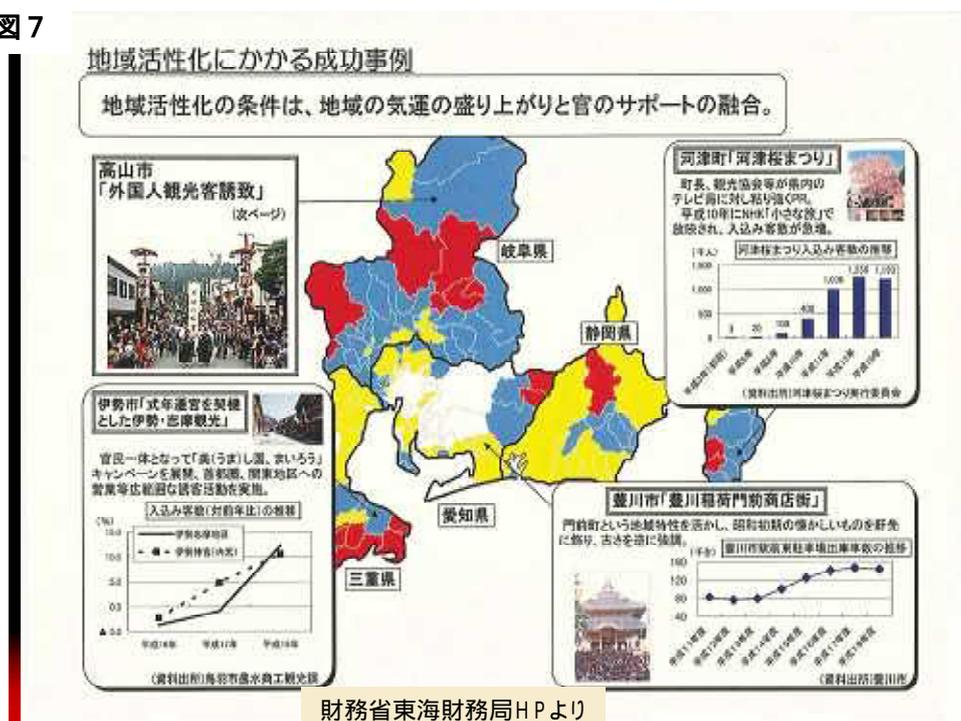
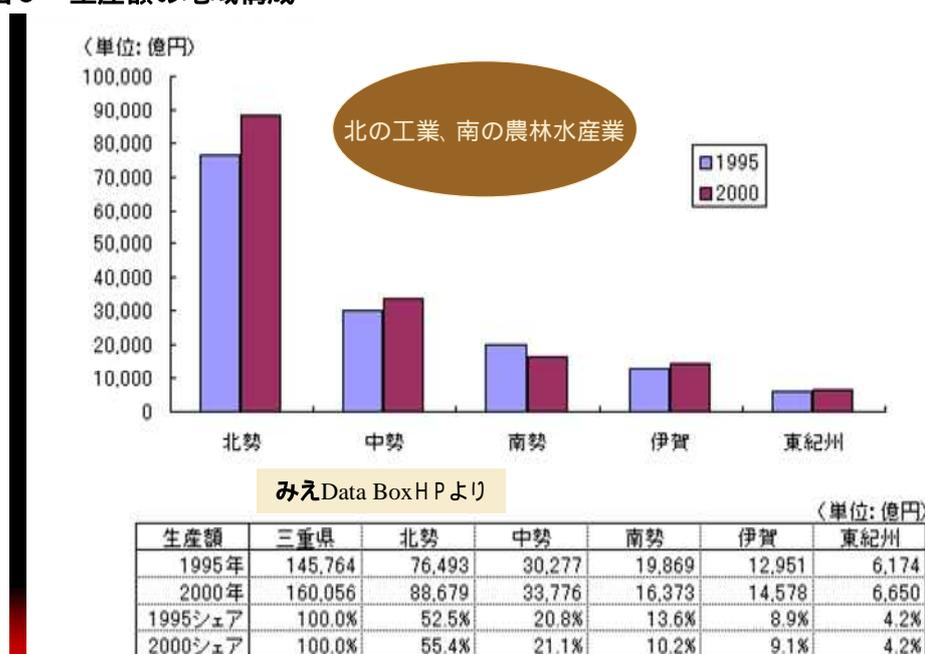


図7は東海地域での地域活性化の成功例を紹介したものであるが、三重県では伊勢神宮の式年遷宮を契機に伊勢志摩への観光客数を伸ばしてきている。伊勢志摩を中心に、自然に恵まれた三重県南部の魅力、定住者あるいは長期滞在者の確保に向けて見直すことも、経済的にみた持続可能性の確保には必要なことであろう。

図8は三重県を地域別に分けて、生産額を示したものであるが、ここに移住や長期滞在型の生活産業を取り込むことができるなら、南北経済格差がある程度は縮小する可能性があるだろう。

図8 生産額の地域構成



もう一つの可能性は、林業にある。日本の林業は木材の搬出に費用が嵩むので、国際的に競争力が劣るとされてきた。しかし、外材に高品質なものが減っていく将来、高級な木材の生産地として見直される時代がくるだろう。例えば、インドネシアでは良質なチーク材などがすでに品薄になっており、豪州でも太い硬質の木材は高騰している。日本の木材の搬出が合理化されるように技術開発を期待したいものである。何らかの工夫や政策があって、将来電力が安く使えるようになれば、それが可能になるであろう。

3. 将来展望

北勢を支えている工業は、当分衰えないだろう。世界をリードする日本の、そして三重県の工業は、そこに働く人たちに生き甲斐を与えていく。したがって、質の高い労働力を育むことが、三重県にとっての持続可能な教育の一つの側面であり、理科好き少年を育てることもその範疇に入るであろう。ここで言う労働力とは、単

に生産現場に貢献するだけでなく、新しい技術を開発し、あるいは改善する創造力に満ちた質の高いものを指すことは言うまでもない。

ところで、三重県も例外に漏れず高齢化社会を迎えており、ますます高齢化が進む。よって、工業化が進んでいる北勢地域でも高齢者のケアが大きな産業になりつつある。ましてや、既述のように長期滞在型あるいは移住者むけの地域開発を行うとしたら、観光や自然という資源に恵まれた県南部においても高齢者のケアが若者達を中心に就労機会を提供することになるだろう。そうなるためには、低賃金できつい労働が強いられる現状を克服しなければならない。もしエネルギーとりわけ電気エネルギーが安く使えるようになるなら、介護ロボットが肉体労働を補助してくれたり、あるいは要介護者の自律を大幅に助けてくれることになる。

自然に恵まれた環境を維持し、そこに移住者あるいは長期滞在者たちが集うような環境を作るには、地域企業が企業文化として市民活動などを補佐して、移住者や長期滞在者を取り込んで、住みよい自然環境を保全し、そこに仲間作りが芽生えるような仕組みを育てていくことが期待される。勿論、地方自治体がその管理運営をサポートしたり相互関係を調整したりすることも不可欠であろうが、お上から与えられた仕組みではなく、NPO 法人などがリーダーシップを発揮して、そうした仕組みを作っていくのが望ましい。

移住者や長期滞在者たちが地元市民の活動に積極的に参加していく仕組みづくりの表立った目標は、脱炭素社会の構築であろう。したがって、山林や海洋保全に加えてエネルギーを上手に使う新しい電気文明の構築もその範疇にはいるであろう。

さらには、NPO 法人が主体となって、シニア世代が若いカップルの子育てを支援するのも、その範疇にはいるように配慮したいものである。世代を超えた共存が、持続可能な社会作りを支える大切な要因であると考えたい。

<h3>生き甲斐のある就労機会とは</h3> <ul style="list-style-type: none">・ 高齢化社会を支える 介護 等のサービス。・ 安全な就労機会を創造する新しい 社会工学 すなわち人に優しいインテリジェンス・ロボットや五感を癒す情報技術の産業化。・ 自然環境保全活動の 持続可能化 企業文化としての定着 市民・教育活動 	<h3>クリーン・エネルギーが それを実現する</h3> <ul style="list-style-type: none">・ 脱炭素社会の実現と、エネルギー資源自給率4%の日本が、安心してエネルギーを使えるように、それを支える電気文明技術立県化。 電気自動車、新エネルギー、 エネルギー高効率化 山林保全 海洋保全 <p>その実現には、未来に抱負の持てる 教育 立県を！ 21世紀のエジソン、21世紀のナイチンゲール 21世紀の二宮尊徳</p> 
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

最近では里山が荒れている。孟宗竹が繁茂して日本中の里山が荒れている。三重県でもよくみられる環境の変化である。竹の有効活用は最近あちらこちらで見られ、畜舎のマットに活用したり、あるいは竹を粉碎して酵素と混ぜて飼料に添加して健全な家畜を飼うのに役立つことが立証されたりしている。竹を広く活用することにより、里

山の保全と地元の竹資源による木材資源の節約など、種々の便宜が得られる可能性がある。

持続可能な成長の要因の例

- 産業と労働: 縮小する労働人口と産業の発展の矛盾 人口増加 幸せな結婚 婚姻率の増大 女性とくに母親の労働環境改善
- 高齢化と社会保障: 産業振興 企業納税の増大と堅持
- 産業と自然: 水資源 上流の山林保全 間伐、植林 産業界による自然保護活動の支援 市民活動 環境教育
- 産業の無人化 技術開発 (広義のロボット) 電力技術による人間代替 電源拡大



持続可能な成長を支える 共生 関係の発掘

- 上流の自然環境保全 沿岸漁業振興 伊勢湾の環境保全 産業振興
- 労働人口減少の補完
 - 母親の就労支援 少子化への歯止め 共生
 - シニア世代による育児支援、児童保育支援
 - シニア世代 子ども ;世代間の 共生

出前講師(夕方学校で実験、体育、技能等々) 街の学校(公民館、図書館、等々)



共生の例;

農業に関する分野

- 昆虫と農業の共生: 授粉が自然に行えなくなった欧米、三重県はどうか?
- 食と酪農の共生: 人間の食べ残しを飼料に。
- 荒れ狂う竹やぶから孟宗竹を駆逐

竹の高付加価値利用

- 農業と林業と漁業そして工業の 補間関係の発見、創造。



地域間の 共生 の発見を!

- 北勢と南勢の 共生 とは?
 - 南の観光資源を開発し、グリーンツーリズムで活性化。
 - 南の豊かな食材・木材を三重の地産地消の柱に。
 - 南の生産者と北の消費者を直接結ぶ。
 - 電源立地で、地元は発展 シニアのパラダイスを創る。

具体的な 共生 の仕組みを 想像 し、創造 する 21世紀の 持続可能な三重



このような思考は、共生 関係を見つけることによって現実的なアイデアへと繋がっていく。共生 は例えば県の南部と北部との間の地域間、既述のようなシニア世代と若夫婦との間などの世代間、あるいは、川の上流と下流に住む人たちの間、異なる産業間など種々考えられる。共生 とは新しい補完関係を見つけて、見つけた関係を人の交流や物の交流に結びつけるところに、持続可能な社会 形成へと発展していく。

脱炭素社会あるいは低炭素社会に向けて、緑を保全し、川と湾の自然を保全していく社会。その社会では、きつい労働作業や衰えた肉体運動能力を、ロボットがサポートする。家庭や介護施設にロボットがなくてはならない存在になる。また、移動も従来の石油依存型すなわちガソリンやディーゼルエンジン主体ではない、クリーンで省エネ型の電気自動車や電気移動補助車が主体になる。

未だ電気自動車もロボットも高価である。これを三重県は県を上げて低価格普及を狙う。県下での技術開発と製造は勿論のこと、電気エネルギーの生産県として、低価格かつカーボンフリーの電気エネルギーを得る方策を考える。かくして、未来の成熟社会を先取りした 持続可能な社会 を創造する。それが、本報告の願いでもある。

如何にして 共生関係を 発見していくか？

- 異なる集団の接触
- 異なる年代の接触
- 異なる産業の接触
- 興味のあるかが異なる人々の出会い
三人よれば文殊の知恵
百人よれば すごい 知恵